

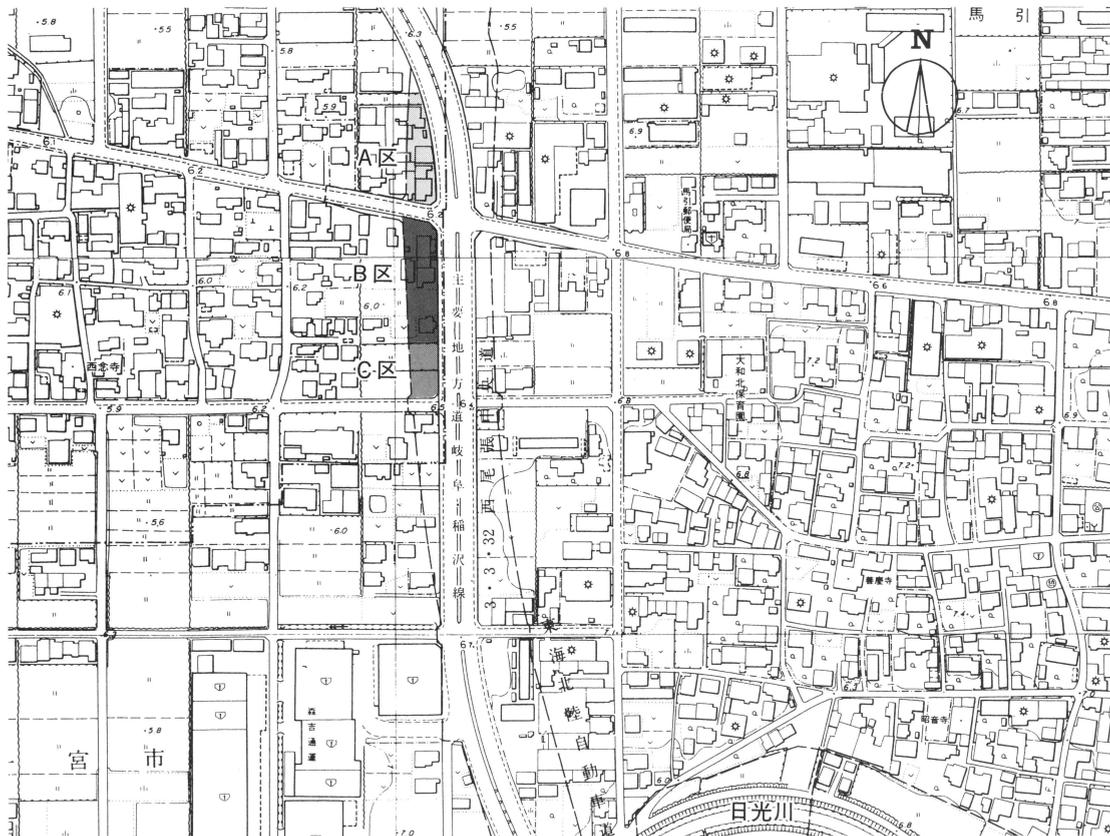
馬引横手遺跡

調査の経過 馬引横手遺跡は、一宮市大和町馬引字横手から尾西市筥屋にかけて広がる遺跡で、木曾川水系日光川上流域に形成された標高6m前後の自然堤防及び後背湿地上に展開している。

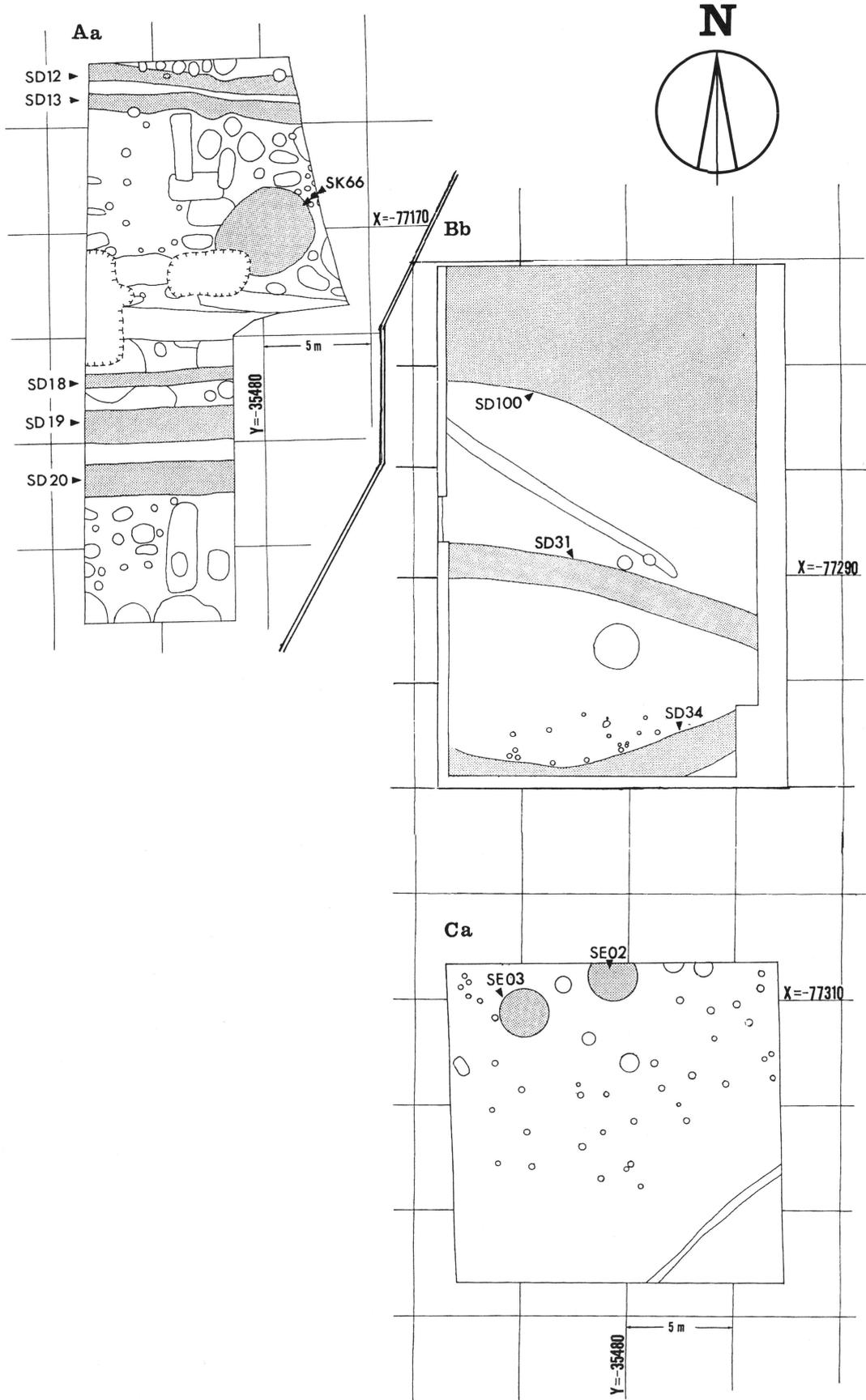
本遺跡は、中世の遺物散布地として県遺跡番号02097で登録されている。本遺跡の南の日光川左岸には鎌倉時代から室町時代の遺物散布地として知られる毛受遺跡(県遺跡番号02098、一宮市大和町毛受)や、本遺跡の東側、起街道沿いには法圓寺中世墓遺跡(県遺跡番号02077、一宮市大和町馬引)が、また、北には、縄文時代の遺物散布地である東荊安賀道遺跡(県遺跡番号07005、尾西市開明字荊安賀道)が存在する。平成5年に実施した試掘調査では、中世の遺構が確認できている。

今回の調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施しており、本年度は平成7年10月より平成8年3月までに西尾張中央道の西側で2529㎡を調査した。調査はA区～C区の3つの調査区に分割し、それぞれをうって返して実施した。調査期間は平成7年10月から平成8年3月である。

(小泉 渡)



調査区位置図(1:5000)



遺構配置図

調査の概要 調査の結果検出できた主要な遺構は、古墳時代前期、平安時代後期、鎌倉時代後期に大きく分けることができる。各時期の遺構について、調査区ごとに述べていくことにする。

A区 起街道の北側に位置するこの調査区では、鎌倉時代後期の遺構が検出された。

調査区を東西に横切る溝が並行して数条あり、この溝に区画されるように土坑群が確認された。そのうちS K66としたものは井戸で、検出面から2 m50cm程の底の部分では曲物が一部残っており、上層からは青磁片も出土している。

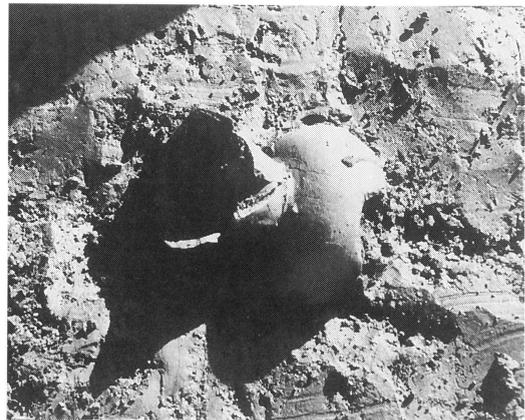
後述するように、B区およびC区では全面を洪水性の堆積物が覆い、その上の面で鎌倉時代後期の遺構を確認しているが、A区においては、下層の遺構を確認することはできなかった。地形的には恐らく起街道の位置する部分がもっとも高く、南に向かって低くなっていると想定することができる。

B区 調査区北側のS D100は北に向かって大きく落ち込んでいく谷と考えられる。S D100を覆う層からは縄文時代晩期の土器が数片出土しており、縄文時代後期の谷と考えられる。

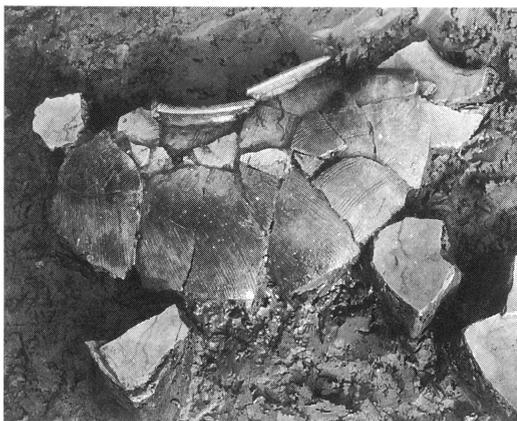
この谷に並行するように古墳時代前期の溝である、S D31がある。上層からは宇田型甕や須恵器が、下層からは松河戸式期の土師器などがまとまって出土しているが、さらにこ



S D 15 土器出土状況



S D 31 土器出土状況



S D 31 土器出土状況



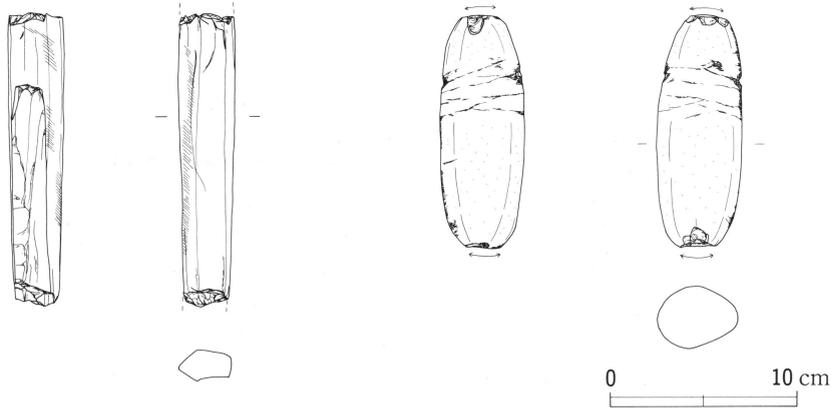
の溝には石刀と棒状石器も混入していた。石刀は頁岩製で、頭部は欠損しているが沈線文様が刻まれていたかもしれない。棒状石器は細長い棒状の石器で、上下両端に敲打痕を残す。そして両側面には刻みが入り、石器を縛ったように思われる擦痕が認められる。この2点は縄文時代晩期に属する石器と思われ、土器の存在と併せてこの時期の遺構の存在が考えられる。南側にあるS D34も古墳時代の溝であるが、S D31と比べて北東方向に曲がっている。

平安時代後期の遺構としては井戸や土坑、溝があるが、この上面を洪水性の堆積物が厚く覆っており、その上の面で鎌倉時代後期の土坑をいくつか検出した。

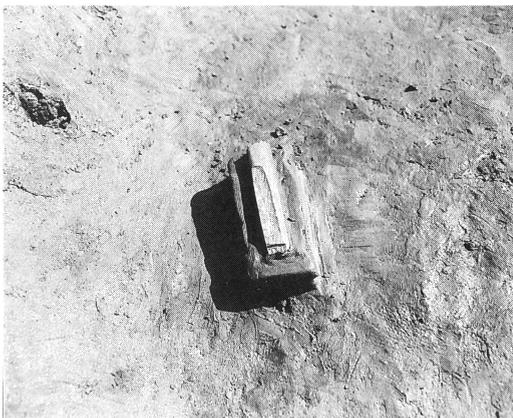
C区 B区と同様に調査区全体が厚い洪水性の堆積物で覆われており、その上の面で鎌倉時代の土坑を検出している。

下の面では、平安時代後期の井戸と古墳時代前期の柱穴などを検出したが遺構は稀薄である。調査区の南に向かってやや低くなっており、B区の状況と併せて考えると、遺跡の中心部分はB区とC区に挟まれた部分から西の方向に広がっていると思われる。

(伊藤太佳彦)



石刀・棒状石器 (S D31)



石刀出土状況



棒状石器出土状況